

あなたが初めて赤ちゃんを授かった若い母親・父親だった頃を思い返して下さい。

「お母さんだよ、あたしだよ」と心をこめてあなたが何度も呼び続けた結果、ついにはあなたがお母さんだと赤ちゃんが気付いてくれるときがやってまいりました。そのとき、あなたはどんなにうれしかったことでしょう。

私達がこの世に生れてきたときも同様です。私の母親は「お母さんだよ、あたしだよ」と心をこめて呼掛け、赤ちゃんだった私が遂にそのことに気付いたとき、今はいません父母はどんなに喜んで下さったことでしょう。

この世とお別れして、阿弥陀如来のお浄土に生れて行くのも丁度そのようであります。

「なんまんだぶつ」が親様のお喚び声だと気付かせて戴くとき、阿弥陀様はどんなにおよろこびになることでしょう。

称えれば直ちに聞こえて下さる南無阿弥陀仏が阿弥陀様のお喚び声だと気付かせて戴くこと一つで私はお救いに与かるのです。

これからは、朝目覚めた時、夜休む時、うれしい時、かなしい時、つらい時、いつでも「なんまんだぶつ」とお称えなさいませよ。

いつでもどこでもたった一人でも阿弥陀様は私のすぐそばにいて下さるのです。

聞こえて下さる「なんまんだぶつ」が阿弥陀様のお喚び声だったのです。

通りがかりの介護士さんまでもが音楽りずむに引き込まれるようにしてご参加なさいませ。そこで私は次の様に案内するのです。

「あしたっから若い介護士のお姉さん、お兄さん方ものんのさまのお歌を助けて下さることでしょう。さあ、もう一度歌いましょう」と

終る時、皆さんが拍手をなさいませ。拍手も悪くはありませんが、拍手よりは、なんまんだぶつのお念仏を聞かせて戴ければ阿弥陀様はもっとお慶びになった筈です。お念仏がご本願に誓われた行だったからです。

深く頂戴しましょう

のんのさまの歌は、のんのさまにお願いするように見える表現で終始しています。

でも浄土真宗のみ教えは、衆生(私)から阿弥陀如来にお願いするものではありません。

なぜなら、阿弥陀如来のご本願叶って仕上って下さり、回向されたお名号に喚(よ)び覺まされるみ教えだからであります。

この辺りは、歌ですから言葉の選び方に制約があって致し方のない面があります。

でも折角ですから、浄土真宗のみ教えにできるだけ忠実に歌の文句を選び直すということ

どういう風になるでしょうか。

なもあみだぶつ なもあみだ
なもあみだぶと となえませ
なもあみだぶと たたえませ
なもあみだぶと きかしゃんせ

なもあみだぶつ なもあみだ
なもあみだぶと はかりませ
なもあみだぶと たのまんせ
なもあみだぶと めざめませ

ななつのうみに はしかけて
せかいにつなごう みだのはし
はしははしでも ろくじばし
みだのじょうどに わたるはし

【後書き】「なむあみだぶつ なもあみだ」は、もはや解説は要りません。

阿弥陀如来のお救いは、お名号をお聞かせに与ることによる救いでありました。

お名号には、如来様のうち最もポピュラーなのが南無阿弥陀仏の六字のお名号です。

阿弥陀如来は、衆生がこれに遇わせて戴く為に第十八願文において「乃至十念」とお誓い下さいました。

なぜなら、十方の世界の迷いの衆生に、間違いなく、お名号を聞かしめる確かな手段が、各々の世界の衆生自身にお名号を称えせしめることだったからです。

私達が称えるお念仏は、如来様が予め如来様のお手許で、確かに間違いなくお名号を聞かしめる確かな手段としてお確かめ遊ばした、仏の口業(ぶつのかごう)だったのです。

その仏の口業を阿弥陀様は衆生(私)に回向(えこう)して下さいました。

だから、娑婆世界の私達は如来様の願いの通りに、如来様の仰せの通りに「なもあみだぶつ」と称えさせて戴くのです。

ところで、南無阿弥陀仏と称えさせて戴く行い(口業)は、阿弥陀如来のお名号がどんなにすばらしいかをお讃え申し上げる行いであり第十七願文に誓われたご本願です。

そのことは、既に七高僧の『浄土論』、『浄土論註』のお指図の通りであります。

私と言う愚かな凡夫が称えるお名号でありながら、その本質は阿弥陀如来から本願力廻向されて賜った如来様直々のお名号ですから、諸仏如来が讃嘆なさるそのお名号に勝ると

も劣らなかったからです。

そこで、実際に、「南無阿弥陀仏」と称えさして戴くと言うとどうでしょう。直ちに「南無阿弥陀仏」と聞こえて下さいます。

聞こえて下さる南無阿弥陀仏は、お名号のふるさとであるお浄土からただ今直々に届いて下さる如来様のお喚び声であります。

このように南無阿弥陀仏と称えれば直ちに聞こえて下さるお名号をお聞かせに与り、喚び覚まされること一つで、衆生(私達)は阿弥陀如来のお浄土に迎え取って戴くのです。

後はそのお謂れをじっくりとお聞かせに与りお育てに与るばかりであります。合掌
【教学】浄土真宗のお救いは信心一つによるお救いでありませぬ。ですけれど、信心が先で念仏が後なのではありません。念仏そのものが如来様から賜った口業であり、仰せの通りに称えることが信心だったからです。合掌

親鸞聖人七百五十回大遠忌団体参拝は、
十月十一日(火)でございます。お同行の皆様には心して御待ち受け下さいませ。
正覚寺仏壮例会 毎月第一日曜日午後八時より
正覚寺仏婦例会 毎月十六日午後七時半より

著作編集兼発行元 (本願寺派 正覚寺内)

〒520-0501 大津市北小松四五二番地、 077-596-0166、FAX077-596-0196 住職堅田 玄宥
<http://syohgakuji.web.fc2.com/> E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp